

市長が行く

No.20

茂原市長 田中豊彦



責難は成事にあらず！

「責難は成事にあらず」これは小野不由美さんの「十二国記シリーズ」の一つ「華胥の幽夢」(かしよのゆめ)の中の「華胥」という短編の中に出てくる言葉である。

お読みになった方はおわかりだろうが、いわゆるファンタジーの分野に属する物語だが、なかなか多くのことを示唆していて興味深い。

そこには、不正だらけの前王の行う政(まつりごと)に不服を唱え、自分たちの理想とする国を作ろうと立ち上がった志ある人々が登場する。彼らは高い理想を掲げ、前王の悪政を批判し、その王に取って代わり、今までの政治を正しさえすれば世の中が良くなっていくと信じて突き進む。ところが、国は良くなるどころか、なぜかだんだんと傾いていく。彼らは、批判することができる自分たちを、前王よりも有能と信じていたが、自分達の理想を実現していくために、いかに成していくべきかをよく考えなかった。ただ前王のしたことを批判し、それと反対のことをしよ

うとした。挫折した新しい王が、自身への反省をこめて遺した言葉が、「責難は成事にあらず」。

高い理想を掲げて、何かを批判することはたやすいが、それは何かを成し遂げることではない。

民主党のパフォーマンスのともいえる事業仕分けなどを見るたびに、この言葉が脳裏をよぎる。自民党の55年体制を一気に変えることは、かえって世の中の混乱を招くこともあるだろう。確かに無駄も多く、直すべきところはたくさんあるにしても、官僚の天下一りは許せないとしても、無駄と思われる部分を削ったら、仕事がなくなくなる人々もたくさんいる。政治というのはそこが難しいところで、だからこそ、よく現実を見て、吟味して対処していかなくてはならない。

あらためて、現実と理想の間で、問題点を絞り、出来るだけ期限を設けて、実行に移していくことに心がけていきたいと思う今日この頃である(できる限り批判をせずに！)。